



## 巫女への変心

長坂 康代 民博 外来研究員

新年最初の外出先が神社という人も珍しくないだろう。神社では紅白の衣装の巫女が清らかに、カミのもとで舞っている。じつは日本独自に見える舞、雅楽にも、遠い大陸の伝統が伝えられている。

### ガニマタがウチマタに

神社にかかわる職というと神主がすぐに思い浮かぶだろう。だが、巫女や雅楽を奏でる伶人（楽人）らの奉仕があつて、正月の歳旦祭から始まる年間とおした祭典が成り立っている。

神に仕える巫女は、襦袢の上に白衣を着て、緋袴（ひばかま）を履くのが通例である。とくに緋袴は巫女だけが身に着ける。かつては神主や伶人の袴同様、緋袴にもマチがあつたが、明治時代に女性のために行灯袴（あんどんばかま）が台頭して以降、スカート状が主流になった。

神社の鳥居をくぐって神聖な空気に触れ、手水で清め、拜殿の前で手を合わせる。そして、巫女の装束に着替え、黒髪を後ろで束ねて装飾を施して「変身」する。すると、歩くときいつも振っている腕が身体の前で重ねられ、ガニマタの大股歩きもウチマタの摺り足になる。大口を開けて笑うところでも口を閉じ、言葉遣いも丁寧になり、氏子や参拝者らに微笑みで接するようになる。ふだんは俗世にいて、必要に応じて駆り出される助勤の巫女でも、ひとつひとつ変身を経るなかで「変心」もするのだから、

と舞う姿や、本殿に響く鈴の音、途中で幾度か回るときに長く垂れた裳の裾が床をひきずる様子は、平安貴族を彷彿とさせる。舞姫も、重くて暑い装束を着ていることなど忘れて、その舞の優麗さに酔いしれる。

### 林邑からもたらされた舞

舞としばしばセットになる雅楽は、日本でもっとも古いオーケストラである。ほぼ一〇世紀（平安時代中期）に今日の形になった。「塩梅」（雅楽では「えんばい」と読む）や「打ち合わせ」「八多羅」「野暮」はすべて雅楽用語だが、わたしたちの日常生活にも浸透していることばである。雅楽は、意外と身近なのだ。

雅楽は、神楽や東歌などの「国風歌舞」、「大陸系の楽舞」（器楽と舞）、催馬楽や朗詠の「歌物」に分類される。そのなかでも「大陸系の楽舞」は、中国系の左方（唐楽）と、朝鮮系の右方（高麗楽）に区別される。「蘭陵王」

なんとも不思議なものである。

### 平安貴族を彷彿とさせる

祭典では、巫女は祭祀舞の「豊采舞」や神楽舞の「浦安の舞」などを、雅楽の演奏に合わせて舞うことがある。「豊采舞」で巫女は、白衣に緋袴の装束に、千早という薄い羽織を着て、額に花簪（はなかんざし）をつけ、紅白の布帛（ふはく）をつけた柵（さかき）を手に持つ。神主や



巫女の緋袴は夜も映える。巫女がいると場が華やかになる

楽人の狩衣とは異なり、千早は巫女のみが着る。

「浦安の舞」の本装束として、巫女は通常の装束の上に華やかな十二単様の衣と小忌衣（こきぎぬ）とよばれる唐衣を身にまとい、腰巻のような形の裳を腰に当てて手前で帯を結ぶ。額には花簪をつける。まず扇で、そのあと五色の絹がついた鈴にもちかえて舞うのだが、大きな檜扇（ひのうぎ）を広げてゆったり

（陵王）ともよばれる）は、北斉の武勇才智に長けた蘭陵王が、美形を隠し恐面を被って軍の士気を高め、周の大軍に勝利したという逸話にちなんだ左方の舞曲である。舞人は、竜頭を模した面を被り、緋色の袍の上に襦袢という袖のない貫頭衣を着ける。そして、緋房のついた金色の桴（ばち）を右手に持って舞台にのぼる。「陵王」は、勇壮でリズムミカルかつ絢爛豪華な舞である。これは、林邑（ベトナム中部沿岸部にチャンパー人が二世紀にたてた王国）の僧侶哲（てつ）によって八世紀にもたらされたといわれる。林邑の楽は「林邑楽」として唐楽に分類される。

二〇一三年、日本とベトナムは「外交関係樹立四〇周年」を迎えた。はるか昔に林邑から伝来した曲や舞が、国風化されて日本の伝統文化となつた。このベトナムの土地から来た楽舞が日本だけで今なお演奏され舞われ続けていることは、神社・雅楽・ベトナム研究にかかわる者として、大変感慨深いものがある。



楽人は、狩衣を着て烏帽子を被る



「豊采舞」は乙女舞ともいう

平安時代の雰囲気を出す「浦安の舞」の本装束



面と装束を着用すると、陵王が舞人（まいりん）に乗り移る（提供：フジフランソフ）